神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

aunque 節中の叙法について (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福嶌, 教隆, Fukushima, Noritaka メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/790

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

aunque 節中の叙法について(2)

福　嶌　教　隆

前稿（1998）「aunque 節中の叙法について(1)」（『神戸外大論叢』第49巻第2号，pp.29～43）は，3つの節から成っていた。第1節「緒言」で考察の目的を述べ，第2節「接続法をとる aunque 節と「事実」」では取り扱う問題を説明した。第3節「先行研究」で従来の学説を4種に分類してその優劣を論じた結果，「事実を表す aunque 節が接続法をとる場合は，前提となる副情報を表す」と見なす見地が最も有力であるとの帰結に至った。(8)

本稿では，以上の論点を踏まえ，収集事例とインフォーマント調査の結果を分析し，結論を導くことにする。

＊　本稿は，拙稿（1998）を受けるものです。前稿発表後，その帰結部分を口頭発表「aunque に導かれる叙法について」（日本イスパニヤ学会第46回大会，於東京大学，2000年10月28日）および拙稿（2000）にて公にし，諸賢より有益な提言を受けました。また大阪外国語大学の Margarita Nakagawa さんにはペルー人を対象とするインフォーマント調査を実施していただきました。ここに厚く感謝します。

（8）　なお，前稿発表後に筆者が知りえた諸研究には，次のようなものがある。①第1説，即ち「事実を表すaunque 節に接続法が用いられた場合，前提となる副情報を表す。」と見る立場には，Pérez Saldanya（1999），Flamenco（1999），Rodríguez Rosique（2001），Haverkate（2002），Ligatto（2002）がいる。辻井（2003）はこの説明を después de que に導かれる節へも拡張している。②一方，第3説，つまり「先述の場合は接続法の基本的機能の延長と捉える。」という立場に近い研究者としてGarachana（1999），Hallebeek（2001）がいる。③また，第1説を積極的に教育に取り入れた著作としては，Matte Bon（1992），Sánchez Lobato他（1998），Borrego 他（2000），Díaz 他（2002）などがあげられる。④ Moreno（1996）は，この用法の複雑な実態を非スペイン語圏の学習者に教育することの困難さを恐れ，たとえば日本語を母語とする学生には「aunque＋直説法は『けれども』，aunque＋接続法は『したとしても』」と直訳して理解させる方が教育効果が上がると説く。⑤ Rivarola（1976）は，aunque 節には古くから接続法だけでなく直説法も用いられていたことを多くの資料にあたって立証している。13世紀までの資料から直説法7例，接続法18例の事例が，また14～15世紀の資料から直説法161例，接続法295例の事例が得られたという。従って前稿第2節における「aunqueは，かつては専ら接続法を要求した。」という指摘は無効となる。

4. 収集事例

4.1. 概説

本稿の主たる資料には上田（1984～97）を利用する。これは現代スペインの30の演劇作品からなる，総語数488,261の資料である。Real Academia Española の CREA や Brigham Young 大学の Mark Davies 教授が公開しているコーパスを用いれば，はるかに大量の事例が収集できるが，個々の事例の統語的・意味的特徴を子細に検討するには，膨大でありすぎる。そこで今回は一個人で処理できるサイズの，しかも良質な資料として，上田（1984～97）を採択した。

さて，上田（1984～97）には，aunque という語が258回出現する。その内訳は次のとおりである。

(15)

	前　位	中　位	後　位	単　独	計
直説法形態の動詞と	11	3	29	27	70
接続法形態の動詞と	44	14	66	42	166
その他	2	5	10	5	22
計	57	22	105	74	258

表の横軸の項目は，それぞれ次のような事例を表す。

①前位：aunque節が文中で他の節より前に位置する場合。例：[9]

(16) a. Aunque *falta* mucho tiempo, ¿te acordarás de la tortilla de patatas? Sabes que me gusta frita. (C. Llopis, *¿Qué hacemos con los hijos?*, 360)

b. Aunque así **sea**, sé que mi hijo no lo delató. (L. Delgado Benavente, *Media hora antes*, 128)

②中位：aunque節が他の節の間に挿入されている場合。例：

(17) a. Durante algún tiempo, aunque *conocíamos* nuestros senti-

(9) 以下，引用は，上田博人（1987）*Análisis lingüístico de obras teatrales españolas* 第3巻 *Textos e Índice de palabras* (*versión aumentada*)，東京外国語大学から行い，戯曲の作者名，題名，掲載ページ数を記す。

mientos, procuramos ignorarlos. (J. Salom, *Culpables,* 263)

b. Para los amigos, Manolo, y esta señora, aunque me **esté** mal el decirlo, es mi madre. (J.J. Alonso Millán, *El crimen al alcance de la clase media,* 421)

③後位：aunque節が文中で他の節より後ろに位置する場合。例：

(18) a. Pero lo amo aunque no me *gusta.* (R. Hernández, *Tal vez un prodigio, 196*)

b. No, no se trata de eso, aunque usted no lo **entienda**... (A. Sastre, *La cornada,* 812)

④単独：文がaunque節だけから成る場合。例：

(19) a. —¡Vaya un capricho conservar esa grabación! Resulta indecoro.
—No sabía que hubiera quedado registrada. Nos fuimos precipitadamente, ¿recuerdas?
—Aunque no *es* mala idea. (S. Moncada, *Juegos de media noche,* 451)

b. Anda, di algo, mami... Aunque **sea** un insulto. (J. Mathias, *Un paleto con ¡talento!,* 541)

次に表の縦軸の項目のうち，「その他」は，aunque が次のような要素を従える事例を表す。これらは今回の考察の直接の対象とはならない。

①形容詞（7例)。例：

(20) Porque la casa, aunque muy vieja, no está mal. (A. Buero Vallejo, *Historia de una escalera,* 18)

②前置詞句（7例)。例：

(21) Hasta el punto de que no... de que no debería quedarse a comer en el hotel, aunque con mucho gusto... (A. Sastre, *La cornada,* 811)

③副詞（4例)。例：

(22) Mañana Juan irá de nuevo al despacho..., aunque un poco más

tarde. (E. Criado, *Cuando las nubes cambian de nariz,* 78)

④現在分詞の形態の動詞（2例）。例：

(23) Aunque regándolo, quizá encontráseis el porvenir resuelto. (L. Olmo, *El cuerpo,* 606)

⑤命令法の形態の動詞，名詞（各1例）。

(24) a. Pero sangre sí... Aunque tranquilízate; parece que también la suya es de color rojo. (J. A. Giménez-Arnau, *Murió hace quince años,* 143)

b. Al fin y al cabo una, aunque fregona, también es de la casa, ¿no?... (R. Hernández, *Tal vez un prodigio,* 191)

即ち，aunque が直説法形態の動詞を従える事例の個数が70であるのに対して，接続法形態の動詞を従える事例はその2倍以上の166あるということになる。また直説法，接続法ともに aunque 節が文頭に立つ前位の語順よりも，他の節の後ろに位置する語順の事例の方が多いことも分かる。

次に，aunque に導かれる直説法・接続法の動詞の時制は下のようになる。

(25)

直説法				接続法			
現在	46	未来	2	現在	128	未来	0
点過去	8	過去未来	2	ra 単純形	17	ra 複合形	1
線過去	5	現在完了	7	se 単純形	8	現在完了	12
		計	70			計	166

どちらの叙法でも現在形の使用が過半数を占め，その他の時制の事例は少ないこと，また接続法では ra 形が se 形より多く使用されることなどの点で，この分布は一般的な時制の出現頻度を反映している。従ってこの資料に基づく限り，aunque 節特有の時制出現傾向といったものは認められない。

4.2. 直説法を用いた aunque 節

直説法を用いた70件の事例は，全て事柄を事実として断定的に述べる表現

であり，特異な例は見当たらなかった。たとえば先述の例（16a）は「料理に時間がかかるが，スペイン風オムレツを作ってくれないか？」といった内容であり，「料理に時間がかかる」ことは事実として断定されている。同様のことが（17a）（18a）（19a）でも確認できる。

直説法未来と過去未来は，「推量」「可能性」など接続法の機能に近い用法を持つ点で注意すべきであるが，それぞれ2件得られた事例の中には，接続法と代替可能なものは見当たらない。例：

(26) a. (El diálogo de Engracia e Isidoro, al mismo tiempo que el de Cayetano y locutor, aunque este último *bajará* el tono entrando en dominante el de Engracia e Isidoro.) (C. Llopis, *¿Qué hacemos con los hijos?*, 351)

b. ¿Qué quieres? No se me ha ocurrido nada mejor. Aunque, en el fondo, muy dentro de mí, *sabría* justificarme. (R. Rodríguez Buded, *El charlatán*, 716)

（26a）は「エングラシアとイシドロの会話は，カイェタノとラジオのアナウンサーの会話と並行して行われる。ただし前者が次第に優勢になるにつれて，後者は音量を落とす。」というト書きである。ここに現れた bajará は未来時を表す断定的用法で使われている。また（26b）は「悪い？その程度のうそしか思いつかなかったの。ただし心の底では，自分のしたことの説明ぐらいできるつもりだけどね。」といった趣旨の発言である。sabría は「もし仮に詰問されれば」という仮定条件に対する帰結を表す用法である。どちらもあくまで直説法の機能を果たしていると言えよう。

4.3. 接続法を用いた aunque 節（仮定の事例など）

166件の接続法の事例が表す意味内容は，次のように分類できる。

(27) a. 仮定を表す（140件）

b. 仮言的内容を表す（13件）

c．事実を表す（10件）
d．節中の他の要素の影響を受ける（3件）

このように，事例の大半は，仮定的な内容を表している。先出例（16b）と（19b）を改めて見てみよう。

まず，（16b）は「もし仮にあなたの言うことが本当だとしても，息子は絶対に密告などしていない。」という趣旨の文である。この文の aunque 節の内容が話者にとって事実でなく単なる仮定に過ぎないことは，その直前に ¡Mi hijo no ha delatado a nadie!（息子は誰にも密告などしていない！），No creo nada de lo que ha dicho.（あなたの言ったことを私は全く信じない。）といった発言をしていることから明らかである。

また（19b）は，なかなか発言しようとしない母親にむかって息子が「さあ，お母さん，何か言ってくれ。たとえ悪口でもいいから。」と述べる文である。aunque 節の内容は「母の発言」の極端な場合を仮定した表現である。

即ち，「直説法が用いられた場合は事実を表し，接続法が使われた時は仮定を表す」ことが多くの事例で確認される。これは前稿（1998）の「1．緒言」であげた（1）（2）のような一般的な説明と合致する。

なお，中には aunque 節内の他の要素の影響が強く反映していると見るべき事例もある。それが（27d）の3件である。

(28) Divertido que se haya podido vivir años y años ignorante de uno mismo. Aunque, quizá..., quizá lo normal **sea** esto: que uno viva sin llegar nunca a conocerse. (L. Delgado Benavente, *Media hora antes,* 117)

たとえばこの発話は「自分のことを知らずに何年も生き続けるなんておかしいね。でももしかしたら，それが当たり前なのかも知れない。」といった内容であるが，接続法形態 sea は aunque ではなく quizá の支配によって生じたものであると考えられる。

4.4. 接続法を用いた aunque 節（仮言的用法の事例）

しかし，単なる「仮定」とは考えがたい事例も存在する。まず（27b），即ち，仮言的な内容を表す13例がそれに当たる。これらは，純然たる仮定ではなく，仮定なのか事実なのかを判然とさせず，あえて断定しないことによって語調を和らげようとする表現である。

たとえば先述の（17b）は「ぼく（Manuel）は友人の間では Manolo の呼び名で通っている。そしてこちらのご婦人は，ぼくとはあまり釣り合わないかも知れないが，ぼくの母だよ。」という文である。この aunque 節は「仮に～だとしても」という仮定というよりも，「あるいは～であるかも知れないが」という仮言的な機能を負っていると言えよう。

また（18b）は「私が言っているのは，そういうことではないんですよ。あなたはお分かりにならないかも知れませんが。」と訳すことができる。ここに直説法を用いると「あなたは分かっていない。」という直截的な表現になり，聞き手の感情を害する恐れがある。接続法が選ばれたのは，1つには，それを回避しようという語用論的動機によるものと考えられる。

この用法は，前稿で検討した4つの説のうち，まず第3説を思い起こさせる。第3説とは，「事実を述べる aunque 節中に接続法が用いられる用法は，特殊なものとみなすには当たらない。『仮定を表す』という基本用法を語用論的理由によって拡張した用法と考えれば済む。」というものであった。この項で扱っている事例は，（17b）（18b）で明らかなように「事実を表している」とは断定できないので，第3説の直接対象ではないが，叙法選択と語用論との関係という点で，両者は接点を持つ。

一方，この仮言的用法は，第1説，即ち「事実を述べる aunque 節に接続法が用いられる場合は，前提となる副情報を表す。」という見地と関連していると見ることもできる。つまり問題となる事柄を情報の中心部分からはずし，副次的な扱いとすることは，取りも直さず，断定の中止，またその結果として，聞き手の心証を害さないという配慮につながると考えるのである。

Pérez Saldanya (1999) によれば，次のような文において接続法が好まれるのは「聞き手の心証を害さないよう，断定を避ける」という語用論的理由によるという。更に，このような語用論的効果が生まれるのは，接続法が情報価値の低い事柄を表すことに起因するとも述べている。

(29) a. Aunque te **sobre** algún kilo, no es para considerarte gorda.
b. No debes preocuparte, aunque **tengas** mala cara. (Pérez Saldanya, 1999: 3302)

ここから，第1説と第3説の中から二者択一的選択をするのではなく，両者にまたがるような説明を考えてみることもできよう。前稿第3.5項でTogeby (1953) の「接続法は断定の中止を表す」とする説を「第1説と第3説のかけ橋的存在」とみなしたことを想起されたい。[10]

4.5. 接続法を用いた aunque 節（事実を表す事例の各論）

単なる「仮定」とは考え難いもう1つの場合，即ち (27c)「事実を表す」という事例の検討に移ろう。接続法を用いた aunque 節の事例の中には，文脈または一般常識から判断して，明らかに事実を表していると思われるものが10例あった。それらは以下のとおりである。

(30) No puede ser. Aunque lo **haya visto** con mis propios ojos, ¡no puede ser! (A. Casona, *La barca sin pescador*, 32)

この戯曲では，主人公の前に悪魔が姿を現し，彼を破滅から救う。悪魔が去った直後に主人公はこう叫ぶ。「ありえない。自分のこの目で見たのだけれど，ありえないことだ！」悪魔が現れ，それを主人公が目撃したことは，作品の上では事実であるが，接続法が用いられている。

---

(10) なお，第2説（「事実を表す aunque 節に接続法が用いられる場合は，話し手と聞き手の間の意見対立を示す。」）および第4説（その他の説明）に関しては，前稿第3.5項に述べた理由により，本稿では扱わない。

(31) Te lo escribí, no sé si te acordarás. Entonces te prometí que a la primera ocasión vendría a saludarte... y aunque **sea** al cabo de treinta años, aquí me tienes. (J. Salom, *Culpables,* 265)

これは,「以前，私はあなたに『機会があったらまずあなたに会いに行く。』と約束しました。あれから30年も経ってしまいましたが，今その約束どおり，あなたに会いに来ました。」といった趣旨の台詞である。30年の経過はこの作品の中では事実である。

(32) La has oído, ¿no? La has oído igual que yo. Esa mujer, aunque **sea** tu tía, no tiene vergüenza. (J. López Rubio, *Nunca es tarde,* 337)

「聞いたでしょう。あの女性はあなたのおばさんだけど，恥というものを知らないのよ。」という内容の発言である。Esa mujer (= Flora) が「あなた」(Miguel) のおばであることは作品上の事実である。

(33) Aunque no la **haya vuelto** a ver, cada vez que me acordaba de esta canción la tenía a usted presente. ¡Cómo desafinábamos! (J.J. Alonso Millán, *El crimen al alcance de la clase media,* 428)

これは，2人の女性が久しぶりに再会した場面で，1人が述べる文である。「あれからあなたに会う機会がなかったけれど，この歌を思い出すたびにあなたのことを考えていたわ。私たち，よく音程をまちがえて歌ったわね。」という内容で,「会う機会がなかった」のは事実である。

(34) Además, casarse con un hombre de uniforme, aunque **sea** el de ingenieros, es una temeridad. (J.J. Alonso Millán, *El crimen al alcance de la clase media,* 440)

知人の結婚式から帰宅した女性がこう言う。「技師の制服とは言え，制服を着た男性と結婚するのは無鉄砲ね。」知人の結婚相手は技師であるが，それを表す aunque 節には接続法が用いられている。

(35) Gracias, no. ¡La verdad! Vieja estoy para doncella, y menos de una señorita como tú; pero se hará lo que se pueda, ¡qué caramba!, que mi voluntad suple, aunque ya no **tenga** joventú. (F. Sassone, *¡Yo tengo veinte años!*, 847)

これは Chacha という名の家政婦の発言で，「お礼だなんてとんでもない。本当のことを申したまでですよ。私はお嬢さまに仕えるには年をとり過ぎていますが，できるだけのことはいたしましょう。若くはなくても，気持ちが肝心ですから。」という内容である。Chacha が若くはないことは，第1幕のト書きで "criada vieja" という設定が明示されていることや，本人も Vieja estoy と認めていることから，明らかである。

(36) (37) —Eso no; a mí me quiere. Y a ti. Y si apalea millones, de la paliza algo me toca a mí que él aventó porque es mi amigo. ¡Nuestro amigo!
—¿Nuestro?
—Nuestro, nuestro. Porque me prestó dinero, y al prestármelo a mí te lo prestó a ti también.
—¿A mí?
—A ti, a ti, a los dos, aunque yo solo se lo **pague**..., cuando pueda pagárselo y él quiera admitirlo.
—¡Ah!, yo no sabía...
—Pues sábelo y agradécelo. Prestar dinero sin interés ninguno es la mejor prueba de amistad; y sólo el hombre puede darla. El perro, no; aunque **sea** el mejor amigo del hombre, que si pudiera... Claro que tampoco puede pedirlo el pobrecito. (F. Sassone, *¡Yo tengo viente años!*, 854)

ここには該当する事例が2つ連続して現れている。これは次のような男女の対話である。「彼はぼくと君に金を貸してくれた。といっても返すのは，ぼくだけだけどね。」「知らなかったわ。」「知っておいてくれ。無利子で金を貸すのは最大の友情の証で，それができるのは人間だけだ。確かにイヌは人間の最良の友というけれど，イヌにはそれができない。無論，借りる方も無理だがね。」第1の aunque 節が表す「借金の返済は男性だけが負っていること」は，この文脈の中では事実であり，第2の「イヌが人間の最良の友であること」は一般的社会通念だとの前提にたって発話が進められている。

(38) —No sabemos nada de la vida de mi tío. Ni siquiera le conocíamos. (...)
—Como si presintiera su muerte, me llamó un día a su casa y me dijo: "Cuando vayas a España, porque yo sé que lo que te gusta ahora es España, vete a ver a mi sobrina. Le dices que me acuerdo mucho de mi hermano; que aunque **estuviera** cincuenta años sin escribirle, le quise siempre mucho. Que no me olvidé nunca de la casa en que vivíamos cuando él y yo éramos pequeños." (C. de la Torre, *La caña de pescar*, 871)

ある女性が，伯父の死について告げられ，こう答える。「私は伯父のことをほとんど知らないんです。会ったこともありません。」すると相手はこう言う。「伯父さんは死期を悟ったように，ぼくに次のように言い残したんです。『君がスペインに行ったら，姪に会いに行ってくれ。そして弟（姪の父）には50年も手紙を書いていないが，愛していると伝えてくれ。子供の頃，いっしょに暮らした家を忘れたことはないと伝えてくれ。』って。」伯父 Federico Elízaga が音信不通であったことは，この文脈から明らかである。

(39) Aunque **hayan pasado** dos meses del fallecimiento del tío, yo quiero que sepan que les acompaño en su sentimiento. (C. de la Torre, *La caña de pescar,* 885)

これは（38）と同じ戯曲の中で，叔父の友人が語る文である。「あなたの伯父さんが亡くなって2か月経つ」という内容は，作品の中では事実である。話者自身も直前に“mi amigo Elízaga, que murió hace dos meses”と発言している。

4.6. 接続法を用いたaunque節（事実を表す事例の総論）

以上のように，166件の接続法を用いたaunque節の事例のうち，少なくとも10件は明らかに事実を表している。この用法が全体に占める割合は当然ながら高くはないが，だからといって無視できないものだと言えよう。これに仮言的内容を表す13件を加えれば，14%近くの事例が一般に典型的な用法とされる「仮定」用法には属さないことになる。[11]

これらの事例に第1説を適用することは容易である。たとえば（35）では，「私はもう若くない」という，聞き手も承知している事実を前提として踏まえ，「そんなことより，気持ちが肝心だ。」という主たる情報を伝えていると解釈するのである。即ち，aunque節は主たる情報を支える副次的情報を担っているということになる。

また（30）については，次のように説明できる。この文の発話者が伝えたい情報は，「自分が今体験したことは，ただの夢だ。」という事柄である。「この目で見るには見たが」というaunque節の内容は，演劇の観客も了承済みの事実であるが，発話者はそれを踏まえて，「それはただの夢だ。」という主張を行っている。

しかし多くの事例で，同時に第3説があてはまることも看過してはならない。今取り上げた（30）は，「現実と認めたくない」という気持ちから，事

（11） Garachana（1999）は接続法を用いたaunque節が仮定を表す構文をestructura prototípica（典型的構造），そうでない構文をestructura periférica（周辺的構造）と呼ぶ。使用頻度に関する限り，そう考えていいだろう。またHallebeek（2001）は，収集例56件のうち21件がbackgrounding（背景化），即ち副次的情報を表す用法に属すると報告している。同用法の比率が本稿よりも高いのは，同用法を緩やかに解釈しているためである。

実をあたかも架空のことであるかのように，直説法ではなく接続法で表現していると見ることもできる。

また，(32) では，聞き手の親族を非難せざるを得ない文脈で，断定的な直説法を避け，接続法を用いて語調を弱めているとも解釈できる。

さらに (31) (33) (38) (39) のように，時間の経過の長さに言及するaunque節に接続法が用いられるのは，「その内容に情報的重点を置きたくないから」(第1説) とも，「できれば，長い時間が経ったということを事実として断定しないで，あいまいな表現にとどめておきたいから」(第3説) とも考えられる。

従って，本稿の資料体から得られた事例を見る限りでは，事実を表すaunque節に接続法が用いられる用法は，「副情報を伝える」という第1説の観点と，「断定を控える」という第3説の観点の両面から捉えるのが，最も無理のない説明方法であるように思われる。さらに，両者を結びつけるのは，基底にある「断定の中止」という接続法の働きであるとみなすこともできる。これは第4.4項で仮言的用法を検討した際に至った帰結でもある。

前稿第3節および本稿の注(8)で述べたとおり，近年は第1説がほぼ定説となりつつある。Flamenco (1999) は次の例における接続法形態 haya dado は información dada (既知情報) を表すと説く。

(40) —No acudas a esa reunión.
—Pero es que me lo ha pedido el director.
—Bueno, pues aunque te lo {**ha pedido* / **haya pedido**} él.
(Flamenco, 1999: 3826)

また非母語話者を対象とする教科書では，「información compartida por todos (誰もが共有している情報) を表す時，aunque 節で接続法が用いられる。Usamos el subjuntivo para quitar importancia a ese hecho. (その事柄を重要なものとして扱わないために接続法を用いる。)」(Sánchez

Lobato 他, 1998: 12),「información ya compartida con otras personas (既に他人と共有している情報) を表すとき，接続法が用いられる。」(Díaz 他, 2002: 152) のように，単純明快な規則が掲げられている。

しかし実際には，収集事例 (30) ～ (39) のうち，第1説のみが妥当で第3説が全く不適格な事例というものは，特に見当たらない。むしろ第1説でも，「既知情報」という概念を用いる立場にとっては説明できない事例が存在する。それは (36) である。「話し手と聞き手がある人から借金をしていること」,「その返済は話し手だけが負うこと」は事実ではあるが，聞き手にとっては新情報である。それは ¡Ah!, yo no sabía... という発言からも明らかである。ここに pague という接続法が用いられているのは，その部分を際立せまいとする (つまり主たる情報にしたくない)，あるいは断定せずに済ませようとする話し手の配慮によると見るべきであろう。

つまり，第1説を採る場合には，「新情報・既知情報」の概念よりも，「主たる情報・副情報」の概念を用いる方が妥当であると思われる。また，その上で，第1説の情報構造的観点のみに固執せず，第3説的な語用論的視点も維持しておくことが実情にかなっているであろう。そうすれば，たとえば先ほどの (40) での接続法の使用は，「社長が君に出席を頼んだ。」という事柄をできれば事実と断定せず，単なる仮定として表現したいという話者の意図も影響しているという見方も許されることになる。

5. インフォーマント調査

5.1. スペイン

次に，本稿の課題をインフォーマント調査によって検討してみよう。まずスペイン人を対象とした調査について述べる。筆者を含むある研究グループは2003年にスペイン人を対象に，さまざまな文についての判断を問う調査を実施した。被験者はマドリード，バルセロナなど9地域の大学生188人である。内訳は男性73人，女性115人，年齢は10代～60代にわたるが，大半 (150

人）は20代である。被験者に105の文を印刷した用紙を渡し，それぞれ A. Yo diría así.（私はこう言う。），B. Yo no lo diría, pero lo he oído decir.（私は言わないが，他人がこう言うのを聞いたことがある。），C. Yo no lo diría ni lo he oído decir.（私は言わないし，他人が言うのを聞いたこともない。）のいずれか１つを選ぶよう依頼した。またコメントを書き添える欄も設けた。その成果をまとめたのが高垣・他（2004）であるが，その中で本稿に関与するのは次の２つの文である。

(41) a. Claro que soy español, pero aunque *soy* español, no me gustan los toros.
b. Claro que soy español, pero aunque **sea** español, no me gustan los toros.（高垣・他・2004: #10, #9）

これらは Fernández Álvarez (1984: 59) があげる作例にClaro～pero を冠して，aunque 節の内容が事実であることを明瞭にしたものである。これらの文について被験者から得られた回答は次のとおりだった。

(42)

	(41a)	(41b)
A. Yo diría así.	89人	170
B. Yo no lo diría, pero lo he oído decir.	80	15
C. Yo no lo diría ni lo he oído decir.	15	2
回答なし	5	1

またコメント欄には，次のような回答があった。

(43) a. Lo digo alguna vez, quizás para marcar que el hecho de ser español y gustarme los toros es un tópico estereotipo.（(41a) について。Sevilla, 20代女性）
b. Normalmente diría *sea español* como en el ejemplo (41b), pero esta forma la usaría para enfatizar al hablar.（同上。Las Palmas, 20代女性）

c. Lo digo, aunque, una vez escrito, veo que es incorrecto. Es muy probable que en el lenguaje oral lo diga así..., pero también digo *soy*. ((41b) について。Pamplona, 20代女性)

他に「(41 a, b) のどちらも可」とのコメントが19人からあり，うち5人は「どちらも indistintamente（区別なく）に使える。」と明言していた。

Fernández Álvarez (1984: 60) は，元となった文について「直説法と接続法が区別なく使えるneutralización（中和）の例だが，接続法が好まれる傾向が明瞭に見られる。」と述べている。今回の調査はこれを裏付ける結果となった。とは言え，両叙法を区別なく選ぶ者よりも，接続法のみを好む者がはるかに多いことや，中には (43 a, b) のように叙法選択に意味の差を反映させる者も存在することから，「中和」が優勢であるとは考え難い。

それはさておき，この調査によって，事実を表す aunque 節での接続法の使用を，文法家や文学者ではなく，教養階層に属する一般の人々が広く受け入れることが確認された。

5.2. メキシコ

次にメキシコ人を対象とした調査の結果を記す。これは Scott (2003) が行った調査の一部である。被験者はメキシコ人女性1名，52歳で職業は医師である。Scott は被験者に「(44 a) と (44 b) は，何か違いがあるか？」と問い，口頭で回答を求めた。その回答を (45) に記す。

(44) a. Aunque te *quiero*, no te perdono.
b. Aunque te **quiera**, no te perdono.

(45) *Aunque te quiero, no te perdono,* y *Aunque te quiera, no te perdono. Aunque te quiero* está afirmando que quieres. Se puede decir las dos. Es que *Aunque te quiero* lo estás diciendo: *Te quiero mucho, Juan, pero no te perdono.* Lo estás afirmando. Yo te digo que te quiero. *Aunque te quiera* lo estás diciendo

como en una forma así, no de duda porque lo estás diciendo que lo quieres, pero no en una forma tajante, ¿sí? *Aunque te quiera, no te perdono, definitivamente.* Yo siento que las dos formas están bien dichas. Probablemente, a lo mejor, está mejor dicha la segunda forma que la primera. (Scott, 2003: 85)

即ち，「どちらの文も文法的だが，接続法の方が好ましい。直説法の場合は，aunque 節の内容を独立した情報として提示している。接続法の場合は，内容に疑惑を持つわけではないが，非断定的な表現になる。」のように解釈できる反応である。被験者は非専門家でありながら，非常に鋭敏な把握をしている。第1説，第3説の双方に関与した回答である。

5.3. ペルー

最後にペルー人を対象とした調査の結果を記す。これはMargarita Nakagawaが11人のペルー人に対して，先述の高垣・他（2004）の調査方法にならって2004年9～10月に実施したものである。用いた文は（41a, b）をペルー人むけに改めた（46a, b）とScottが用いた前掲の（44a, b）である。

(46) a. Claro que soy peruano, pero aunque *soy* peruano, no me gusta el cebiche.
b. Claro que soy peruano, pero aunque **sea** peruano, no me gusta el cebiche.

その結果は次のとおりである。(47) に総計を，(48) に被験者ごとの回答を記す。

(47)

	(46a)	(46b)	(44a)	(44b)
A. Yo diría así.	5人	4	8	8
B. Yo no lo diría, pero lo he oído decir.	5	4	2	2
C. Yo no lo diría ni lo he oído decir.	1	3	1	1

(48)

被験者	(46a)	(46a)	(46a)	(46a)
1 (28歳)	A	C	A	A
2 (29歳)	B	A	A	B
3 (29歳)	B	B	A	A
4 (30歳)	A	C	A	B
5 (31歳)	B	A	A	A
6 (32歳)	B	B	A	C
7 (33歳)	A	A	A	A
8 (33歳)	C	C	A	A
9 (39歳)	B	A	B	A
10 (42歳)	A	B	C	A
11 (55歳)	A	B	B	A

興味深いことに，この調査では第5.1節のスペイン人対象の調査ほど単一方向に収束する判断が得られなかった。(46 a, b) (44 a, b) のいずれの場合も，直説法と接続法の選択がほぼ同率で，前者は両叙法とも容認度があまり高くなかった。(44 a, b) については「私は彼を愛している。」という事柄が既定の事実か否かを指定していないので，接続法が用いられた文を「仮定」の解釈で判定した被験者が含まれていることも考えられる。しかしaunque節の内容が事実であることを明示している (46 a, b) でも趨勢は変わらないことから推して，ペルーでは，あるいはアメリカ大陸では，スペインとはやや異なる叙法選択の傾向が存在するのかも知れない。たとえば，「両叙法の中和の度合いがスペインより大きい。」，「事実を表す場合は，情報構造などの要因にとらわれず，直説法が好まれる。」といったことである。この大きな問題については，今後の研究を待たねばならない。[12]

6. 結論

以上の考察をまとめ，次の4点をもって本稿の結論とする。

(12) そもそも Nakagawa がこの調査を思い立ったのは，(41a, b) についてのスペイン人の判断が，ペルー人である Nakagawa 自身の直感と食い違ったことが契機である。なお，拙稿 (1997～2001) では，アメリカ大陸では，de ahí que に類する語句に導かれる節のように事実を表す副詞節で，接続法に替えて直説法が用いられる場合があることを指摘している。

(49) a．事実を表す aunque 節に接続法が用いられる場合は，その節が「副情報」，即ち主たる情報を支える背景（background）の情報を担う。

b．この場合，同時に，話者は，何らかの語用論的動機により，その節の内容を明確には断定せず，仮言的で柔らかな語調，または仮定として表現しようと意図している。

c．上記2項は「ある事柄が事実であるか否かについて話者が判断を下さず，中止していることを表す。」という接続法の基本的機能から生じた帰結ではないかと考えられる。

d．これらの規則の適用の度合いには，スペイン語圏の中で地域差が見られる。

即ち，「第1説」を採りつつも，そこに「第3説」を融合させることを提唱する。また，「第1説」であっても，「既知情報」ではなく「副情報」という概念を用いるべきことを主張する。

ただし，「副情報を伝える」という情報的機能や，「語調を和らげる」という語用論的機能が接続法の基本的機能だと見るのではない。それらの奥にある「判断の中止」という働きこそが重要なのではないかと考える。しかし（49 a, b）を（49 c）という共通項で束ねるためには，より精緻な分析と明確な説明が必要なことは言うまでもない。

なお，本稿では考察対象を譲歩節のうち aunque に導かれるものに限ったが，a pesar de que, por ～ que のような語句に導かれる譲歩節における叙法交替にも，同様の分析ができる可能性があることが，Flamenco（1999）や Borrego 他（2000）によって指摘されている。このような近接構文にも考察を広げていくことも今後の課題である。

引 用 文 献

Borrego, Julio, J. Gómez Asencio y E. Prieto de los Mozos (2000) *Aspectos de sintaxis del español*, Santillana, Madrid.

Díaz, Pilar y María Luisa Rodríguez (2002) *El subjuntivo 1. Nivel intermedio*, Edinumen, Madrid.

Fernández Álvarez, Jesús (1984) *El subjuntivo*, Edi-6, Madrid.

Flamenco, Luis (1999) "Capítulo 59. Las construcciones concesivas y adversativas", *Gramática descriptiva de la lengua española* (I. Bosque y V. Demonte, dirs.), II, Espasa Calpe, Madrid.

Garachana, Mar (1999) "Valores discursivos de las oraciones concesivas", *Lingüística Española Actual* 21 / 2, Arco / Libros, Madrid.

Hallebeek, Jos (2001) "Uso y significado de *aunque*", *Lengua española y estructuras gramaticales* (A. Veiga *et al.*, eds.), Univ. de Santiago de Compostela.

Haverkate, Henk (2002) *The Syntax, Semantics and Pragmatics of Spanish Mood*, John Benjamins, Amsterdam.

Ligatto, Dolores (2002) "Discourse criteria in the selection of mood in Spanish: concessive clauses", *Hispania* 85 / 1, AATSP, Texas Tech Univ.

Matte Bon, Francisco (1992) *Gramática comunicativa del español*, Edelsa, Madrid.

Moreno, Victoria (1996) "Indicativo o subjuntivo en oraciones concesivas", *Actuales tendencias en la enseñanza del español como lengua extranjera. Actas del Sexto Congreso Internacional de ASELE* (M. Rueda *et al.*, eds.), Univ. de León.

Pérez Saldanya, Manuel (1999) "Capítulo 50. El modo en las subordinadas relativas y adverbiales", *Gramática descriptiva de la lengua española* (I. Bosque y V. Demonte, dirs.), II, Espasa Calpe, Madrid.

Rivarola, José Luis (1976) *Las conjunciones concesivas en español medieval y clásico*, Max Niemeyer, Tübingen.

Rodríguez Rosique, Susana (2001) "Las construcciones condicionales concesivas en español", *Moenia* 7, Univ. de Santiago de Compostela.

Sánchez Lobato, Jesús *et al.* (1998) *Español sin fronteras* 2, Sociedad General Española de Librería, Madrid.

Scott, Dinorah (2003) "Mood variation in Spanish: a Neo-Gricean pragmatic explanation", Ph. D. dissertation, Univ. of Illinois at Chicago.

高垣敏博・上田博人・宮本正美・福嶌教隆・Ruiz Tinoco, Antonio (2004)『スペイン語文法課題の検索データバンク』, 平成13・14・15年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書。

Togeby, Knud (1953) *Mode, aspect et temps en espagnol,* Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab, København.

辻井宗明 (2003)「現代スペイン語における過去指示 después de que の法について」,『関西外国語大学研究論集』77。

上田博人 (1984～1997) *Análisis lingüístico de obras teatrales españolas,* 12巻, 東京外国語大学 (第1～3巻), 東京大学 (第4～12巻)。

拙稿 (1997～2001)「アメリカ大陸のイスパニア語における叙法について (1)～(5)」,『神戸外大論叢』48/3, 48/7, 50/3, 51/4, 52/5。

____ (1998)「aunque 節中の叙法について (1)」,『神戸外大論叢』 49/2。

____ (2000)「日西モダリティ対照研究序説」,『日本語とスペイン語 (3)』(国立国語研究所・編), くろしお出版。